

中上級学習者に対する漢字語彙教育の方法

加納 千恵子

要 旨

近年の日本語教育においては、文型・文法中心の言語知識積み上げ方式の学習法から、現実場面における機能やニーズに合わせたコミュニケーションな学習法への転換が図られ、教材のオーセンティシティが重視されるに従って、必要となる語彙の量がますます多くなっているように見える。しかし、そこにおいて、語彙教育に関する新しい方策が示されてきたとは言えない。特に話し言葉中心の初級段階から書き言葉が多くなる中・上級段階へと進むにつれて、漢字語彙の数が加速的に増えていくことが外国人日本語学習者の大きな負担となっている。そこで「表語文字」という漢字の特質を生かして、漢字の知識を語彙力拡張のために効率的に運用することが中・上級のレベルの日本語習得のカギとなるのではないだろうか。本稿では、中・上級学習者の漢字語彙力拡張のために有効と思われる漢字の知識として、漢字熟語の品詞性、助詞等との文法的共起性、他の語との意味的共起性、類義語・対義語などの関連語ネットワークを取り上げ、具体的な漢字語彙力拡張のための教育方法を提案する。

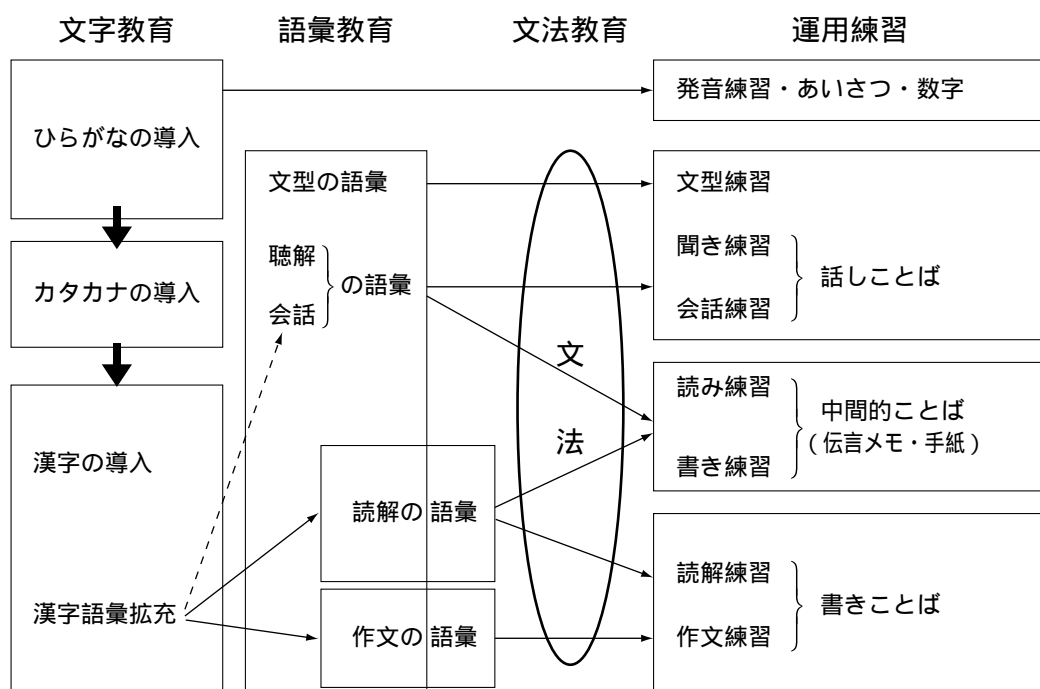
【キーワード】 語彙教育 漢字語彙 語彙力拡張 品詞性 共起性 関連語

Kanji Vocabulary Development for Intermediate and Advanced Learners

Kano, Chieko

In recent Japanese language teaching, a communicative approach based on the functions and needs of actual situations is used in preference to an integrated grammar-based approach. Authenticity of teaching materials is being emphasized, and as a result, a large amount of vocabulary must be learned. However, no special vocabulary building method has been proposed. The present paper proposes an effective Kanji vocabulary development for intermediate and advanced level learners, by using knowledge such as the parts of speech of kanji compounds, grammatical cohesion with particles in sentences, semantic collocation with other words in sentences and making networks of related words.

従来の文型・文法積み上げ方式の教育においては、初級の基本語彙（動詞や形容詞、名詞など）や文型練習のための語彙（基本動詞や形容詞などと文中で共起する語）を一定量ずつ導入することによって、無理なく定着を図ろうとしてきた。しかし、そのように選ばれた文型や語彙で作られた文が、現実世界ではあまり使われることが少ないような不自然なものであるという批判もあり、近年の日本語教育においては、現実場面における機能やニーズに合わせたコミュニケーション型学習法への転換が図られるようになってきた。下の図1は、日本語学習の流れの中における文字教育および語彙教育の位置を示したものである。



このような流れの中で教材のオーセンティシティが重視されるに従って、必要となる語彙の量はますます大きくなっているように見える。授業では、文型練習のための基本語彙が相変わらず必要とされる一方で、現実の場面やトピックに即した聞き練習や会話練習では、話しことば的な日常語彙がかなり必要となるからである。また、掲示や標識、伝言メモなどのタスクベースの読み書き練習に必要な書きことば的な要素の混じった語彙も出てくる。さらに中・上級に進むと、本格的な読解練習や作文練習が始まり、書きことばが学習の中心となることから、漢字語彙の数が加速的に増えていくことが学習者の大きな負担となっている。しかし、そのような膨大な量の語彙が必要とされるにもかかわらず、効率的な語彙教育に関する何らかの新しい方策が示されてきたわけではなかった。

そこで、日本語教育における語彙教育のあり方を再考し、「表語文字」である漢字の知識を中・上級レベルの語彙力拡張のために効率的に運用することができないかと考えた。現代日本語の語彙には、和語・漢語・外来語など出自を異にする語種の別があるが、野村(1999)も指摘しているように、この中で漢語(字音語)は各種の国語辞典、語彙調査で異なり語数では最も多くの量を占めている。したがって、中・上級レベルで日本語の総合的運用力を高めるためには、漢字語彙を増強し、使えるようにすることが非常に重要である。玉村(1993)によれば、「最初期の300ないし500字は要素文字を中心にし、第2期以後は複合文字中心に移行し、熟字(熟語)指導の部分を増やすのが望ましい(p.13)」とのことであるが、もっと早い段階から漢字熟語指導を語彙教育の一部と位置づけて力を入れていくことができるのではないかとと思われる。

森田・他編(1989)によれば、単語はまず「語彙的な意味を持つ(p.13)」とともに「文の中である特定の文法的な性質を持つ(p.15)」のであり、「文体的特徴が備わっている(p.16)」とも言われる。したがって、語彙を学習する際には、それらの意味、文法的性質、文体的特徴などを同時に覚えなければならないことになる。また、単語の語構成や構成要素となっている漢字の機能を知ることその単語が覚えやすくなる場合もある。加納(1999)では、構成要素となる漢字の品詞性と単語の品詞性との間にどの程度の関連づけが可能かを検討した。

本稿では、初級後半から中級・上級の学習者の漢字語彙力拡張のために有効と思われる漢字の用法に関する知識として、漢字熟語の品詞性、助詞等との文法的共起性、他の語との意味的共起性、類義語・対義語などの関連語ネットワークを取り上げ、具体的な漢字語彙力拡張のための教育方法を提案したい。

2 語彙教育の方法 と漢字教育

従来の語彙教育のあり方を探る上で、国語教育における語彙指導の方法をみてみよう。甲斐(1989)は、国語教育における語彙指導の具体的な方法として、次の10種をあげている。

- 1 実物提示法 スライド、さし絵、模型などを含める。その提示が可能であれば、もっとも簡便な方法。図解法もここに入る。
- 2 連想法 どういう言葉が連想されるかを指摘させる。これは、その語句の属性あるいは価値的な意味を把握させることになる。連想法ではまた、類義語や反対語、上位語、下位語、同じ種類の語句が取り上げられることになる。
- 3 類義語の指摘 言い換え法。類似の語句の指摘によって、懸案の語句の理解を図る。類義語の中で適切な語句の選択ができるように図る。
- 4 短作文 その語を使った1～3文構成の短文を作らせる。形容詞や形容動詞のように価値・評価に関係する語句の場合は1文でなく3文構成とする。
- 5 辞書での確認 国語辞書、漢和辞典などを使って確認させる。

- 6 語義の説明 どういう意味か、どういう事物かを説明させる。
- 7 意味分類 『分類語彙表』『類語国語辞典』のような意味上の区別をさせる。
- 8 派生・関連語の指摘 どういう派生語があるか、どういう関連語があるかを説明させる。
 関連語には類義語以外に対義語や上位語・下位語も含まれる。
- 9 空欄補充法 付与の文表現の空欄箇所に適切な語句を入れさせる。
- 10 筆記法 その語句についての知識を書かせる。

これらは主に、読解(理解活動)における重要語句の選択や難語句の解釈などによって、あるいは作文(表現活動)における適切な語句の選択や推敲などによって行われるものである。外国人学習者に対する日本語教育においては、その他に媒介語による説明や翻訳などによって語彙指導する方法も可能であろう。

一方、加納(1997)では、外国人学習者に漢字の学習方法についてアンケート調査したが、その結果、学習者は次のような方法を使っていることがわかった。

- 1) テキストに出てくる順に覚える
- 2) 同じ部首の漢字や類似形の漢字をまとめて覚える
- 3) 読んでいる文章に知らない漢字があったら辞書を引いて覚える
- 4) ノートに整理して覚える
- 5) 字源や記憶のためのストーリーを使って覚える
- 6) 熟語や例文といっしょに覚える
- 7) 何回も手で書いて覚える
- 8) 何回も読んで覚える
- 9) カードを作ったり部屋にリストを貼ったりして工夫している
- 10) その他：漢字をイメージ化して覚える

類義語や反義語、関連語などの連想により覚える

こうして比べてみると、語彙の学習法と漢字の学習法にはかなりの共通点があることがわかる。辞書による確認、作文、筆記などの方法はもちろん、類義語や反義語、上位語、下位語、同じ種類の語句などを連想したり意味分類したりして、意味的な関連語ネットワークを作ろうとする点が共通している。

ただし漢字の場合は、特に非漢字圏学習者にとっては字形の複雑性やイメージ性が特徴として際立つため、類似形の漢字や同部首の漢字といった字形的な関連語ネットワークを作ろうとする方法もかなり多く見られる。加納・他(1989)では、非漢字圏の初級日本語学習者に、制限時間内に頭に浮かぶ漢字を自由に書かせるという自由放出実験を行ったが、日本語の習得が進むにつれて、字単位の意

味的連想によって漢字が放出される段階から、字形的な連想によって漢字が放出される段階へと進み、さらに語単位の意味的連想によって漢字が放出される段階に至るという結果が出ている⁽¹⁾。伊藤・和田(1999)でも、「初級者では形態手がかりが意味手がかりより多く用いられ、漢字能力の向上に伴い、その優位性が意味手がかりにとって替わられることが明らかになった(p.350)」ということが指摘されている。

したがって外国人学習者に漢字を教える際には、その字形的な特徴に着目させる段階にとどまらせることなく、漢字の語としての機能や意味的に関連する語がネットワークを作ることにも着目させて指導することが語彙教育の面から重要になってくるだろう。

3 漢字語彙の意味的・用法的知識

外国人学習者に、漢字の語としての機能、意味的な関連語のネットワークに着目させるためには、どのような知識が必要となるのだろうか。

たとえば、学習者がどこかで「影響」という言葉を見て、辞書を調べたとする。Mark Spahn/Wolfgang Hadamitzkyの『漢字熟語リパース字典』(日外アソシエーツ)には、以下のような情報が載っている。

3j12.1 / 854

影 El, kage light; shadow, silhouette, image, reflection, figure, trace

影響 eikyo effect, influence

影響力 eikyoryoku effect, influence

影響下 eikyoka under the influence of

このように、通常の漢字辞典には、その漢字および漢字の作る熟語の読みと意味は載っているが、その語がどのような品詞で使われるかや文中での使い方の情報(文例)までは載っていない。そこで、文中での使い方を知るために和英辞典で「影響」を引いてみると、次のような記述がある。

影響 (an) influence; (an) effect; (an) impact

～する affect; influence; have influence (on); have an effect [impact] (on)

～される be influenced [affected] (by)

～力のある influential; powerful

これを見た学習者は「家庭環境が子どもの成長に影響した。」というような文を作り、教師はこのような文を「家庭環境が子どもの成長に影響を与えた。」「家庭環境が子どもの成長に影響を及ぼした。」などと直すことになるわけである。「～を与える」や「～を及ぼす」といった文中でよく共起する語の情報が欠如しているためである。

また、学習者が「influence」や「effect」という意味から、それらに相当する漢字語彙を調べようと英和辞典を引いても、次のような類義語が並んでいるだけである。

influence	影響（力）、感化（力）、勢力 【電気】誘導
effect	効果、結果、影響 【法律】発効、遂行

【電気】や【法律】のような分野によって、使われる語彙に違いがあるということは示されているが、品詞の違いや文中での使い方の違いなどは全くわからないようになっている。

例えば、「影響」なら「影響を与える 影響を受ける」という対になる用法の表現が同じくらいよく使われるが、「感化」の場合は「感化する 感化される」という対になる用法のうち、受身形の方が圧倒的によく使われる。また、「感化」は人間の考え方や生き方に共感させることによって相手を変化させるという意味なので、「先輩に感化されてタバコを吸うようになった」とは言えるが、「環境」のような無生物によって「感化」されることはない。

また、「影響」と「効果」では、「影響がある／ない／大きい／小さい」と「効果がある／ない／大きい／小さい」のように共起する述語がかなり共通しているので、全く同じように使われると思われるがちである。しかし、「悪い影響がある／良い影響がある」はよく使われるが、「悪い効果がある」は通常あまり使われない。これは「効果」という語の中にすでに良い結果を予想させる意味が含まれているからだと考えられるが、このような微妙な意味の違いによる用法の違いは学習者にとって非常に難しい。一方、「効果」という語には「効果が上がる／下がる」という用法があり、これは「影響」には見られない。学習者が「効果」と同じように使えんと思いがちな語として「結果」があるが、「結果がある／ない／大きい／小さい／上がる／下がる」というような用法はなく、「結果が出る／結果を出す」のように共起する述語が異なることに注意させる必要がある。

このように、学習者が語彙を正しく使えるようになるためには、文中でどのような品詞として使えるかという品詞性に関する情報、どのような助詞や述語とともに使われるかという文法的共起性に関する情報、どのような意味の言葉とともに使われるかという意味的共起性に関する情報、話しことばで使われることが多いのか、書きことばで使われることが多いのか、という文体的特徴に関する情報、どのような分野で使われるかという分野性に関する情報などが必要であり、ぜひ辞書に載せておいてほしいものである。しかし、まだそのような情報を十分に備えた辞書はできていないのが現状である。さらに、学習した語彙をもとに漢字語彙力の拡張を図るためには、反義語、対義語、類義語、上位語、下位語などの関連語ネットワークを作ることが必要であるが、そのような情報の記載もまだ整っていない。

3.1 漢字語彙の品詞性

筑波大学留学生センターで開講している中級レベルの漢字クラス⁽²⁾で行っている漢字の宿題およ

びテストの結果を分析してみると、特に次のような品詞の用法の誤りが多いことがわかる。

- (1) その子はテレビゲームに熱中になっている。
- (2) 彼の当選は午後 9 時に確実した。

(1)の _____ 部分は、「熱中している」あるいは「夢中になっている」とするべきところであり、このような誤りは「熱中」という動詞性（「～する」の形で使える）の熟語を「熱心」や「夢中」のような形容詞（形容動詞）性の熟語だと誤解しているところから起こると考えられる。(2)の _____ 部分は、「確実になった」あるいは「確定した」とするべきところであり、こちらは「確実」という形容詞（形容動詞）性の熟語を「確定」や「確信」のような動詞性の熟語と混同しているところから起こる誤りであろう。漢字 2 字の熟語については、以下のような 5 種類の品詞性があると考えられる。⁽³⁾

- 1) 動詞性 「感化」のように、「～する」がついて動詞になる性質
- 2) 形容詞性 「適切」のように、「～な」がついて名詞を修飾したり、「～に」がついて副詞的に使われたりする性質
（形容助詞性）
- 3) 名詞性 「結果」のように、「が」「を」などの格助詞をとって主語や目的語等になるという名詞の性質
- 4) 副詞性 「最近」のように、そのまま副詞になる性質
- 5) 熟語成分性 「国際」のように、独立した名詞として使われることがなく、常に他の語について熟語を作る性質

特に動詞性と形容詞（形容助詞）性の間での混乱は、非漢字圏学習者ばかりでなく漢字圏学習者にも多く見られる。これは、母語における漢字語の用法との間のずれに起因するものが多いのではないと思われる。また、名詞性をもつ熟語の中には、先にあげた例のように、「～がある／ない」「～になる」「～が大きい／小さい」「～を上げる／下げる」など、よく使われる述語が特定されるものと、そうでないものがあるので、指導上の注意が必要である。さらに長い漢字熟語になると、2 字熟語同士の組み合わせの他に、「新」「総」「超」「不」「無」「非」のような 1 字で接頭辞となる漢字や、「的」「性」「化」「量」「額」「者」のような 1 字で接尾辞となる漢字がついて複合語が構成されることも多く、語構成の知識も重要になってくる。

3.2 漢字語彙の文法的共起性

文法的共起性の誤りとしては、自動詞・他動詞のとり助詞の誤りや慣用的に使われる助詞の誤り、いっしょに使われる述語動詞の誤りなどがある。

- (3) 今度の旅行の予定が変更することになった。
- (4) 長年の苦勞の末に、ついに実験を成功した。
- (5) そのプロジェクトチームはかなりの成果を出したと評価されている。

(3)の_____部分は「予定が変更になった」あるいは「予定を変更することになった」とするべきところであり、「変更する」という他動詞を自動詞と間違えているところから起こる誤りである。(4)の_____部分は「実験に成功した」とするべきであり、「成功する」という動詞のとるべき助詞の誤りである。(5)の_____部分は「成果を収めた」あるいは「成果をあげた」とするべきであり、「成果」という名詞がどのような述語と共起するかという知識の欠如による誤りであると考えられる。

「変化する」は自動詞で「が」をとるが、「変更する」は他動詞で「を」をとる。「成功する」や「失敗する」は「賛成する」や「反対する」と同じように常に補語の助詞として「に」をとる。「結果」は「～を出す」という形で使われるが、「成果」は「～を収める」「～をあげる」という形で使われることが多い。(3)～(5)のような用法の誤りを防ぐためには、このような文法的共起性に関する知識を既習の知識と関連づけて教える必要があろう。

3.3 漢字語彙の意味的共起性

中級レベルの外国人学習者に多く見られる誤りとして、以下のようなものは、文法的共起性に関する知識の欠如というより、その語が文中でどのような意味(分野)の単語といっしょに使われるかという情報の欠如によるものと考えられる。

- (6) 開発途上国に経済的な応援を行う必要がある。
- (7) その国は隣国との条約を一方的に廃棄した。

(6)の_____部分は「経済的な援助」あるいは「経済的な支援」とするべきところであり、「応援」というのは通常「選挙」や「スポーツ」との意味的結びつきが強く、「経済的」という語とは結びつきにくいところから起こる誤りであると考えられる。(7)の_____部分は「条約を破棄した」とするべきところであり、「廃棄した」というと、産業廃棄物や廃棄船のように「要らなくなった比較的大きなものを捨てる」という意味になる。このように、「経済的」と「援助」、「条約」と「破棄」のような意味的結びつきが強いものは一緒に教えておかないと、辞書で個別に意味を覚えただけでは、上記のような誤りを犯す恐れがあるのである。

このように、その語が文中でどのような分野の意味の単語といっしょに使われることが多いかという情報を「意味的共起性」と呼び、外国人学習者にとっては辞書に載っているべき重要な情報であると考ええる。

また、このような「意味的共起性」の延長上には、反義語や類義語、上位語や下位語などの意味的

な関連語ネットワークが存在する。例えば、「経済的に援助する」の対局にある語句として、「経済的に制裁を加える」「経済的に孤立する」などがあり、「条約を破棄する」の対局にある語句としては、「条約を締結する」「条約を結ぶ」「条約を批准する」「条約を改正する」などが考えられる。また、「援助」の類義語として「応援」「支援」「救援」「救助」など、「破棄」の類義語として「廃棄」「廃止」「廃絶」「破壊」などの使い分けを教える必要もあろう。あるトピックや分野ごとに関連語句のネットワークを作っていくことによって、学習者のニーズに合わせて漢字語彙力を拡張していくことができるのではないだろうか。

4 漢字語彙力の拡張のために

さて、初級後半から中級・上級の学習者の漢字語彙力拡張のために有効と思われる漢字の意味的、用法的な知識として、漢字語彙の品詞性、文法的共起性、意味的共起性、類義語・対義語などの関連語ネットワークを取り上げた。これらの情報を備えた辞書が見当たらない現状では、漢字語彙教育用の教材を整備し、授業において具体的な漢字語彙力拡張のための練習を行っていくことが急務である。

そこで、以下のような4肢選択の用法練習の問題を作成し、授業で使用している。

(8) あの人のやり方はいつも____なので、よく批判される。

- 1 強調 2 強化 3 強引 4 強情

(9) いくつかの可能性を____した結果、この方法に決めた。

- 1 理論 2 論点 3 点検 4 検討

(10) 彼は5年かかってようやく目標を____した。

- 1 上達 2 達成 3 到達 4 到着

(11) 他国から____されたことがないため、防衛に対する考えが甘い。

- 1 省略 2 侵略 3 戦略 4 計略

(12) 親に____をふるう子供が増えている。

- 1 乱暴 2 暴言 3 暴力 4 横暴

(13) 不平等な条約を____しなければならない。

- 1 訂正 2 改正 3 改訂 4 改修

(14) この問題の背景には親の_____があった。(理解)

- 1 不理解 2 無理解 3 非理解 4 未理解

(15) 山中で飛行機事故の_____が見つかった。(死亡者)

- 1 生存者 2 残存者 3 出生者 4 出産者

上記(8)と(9)の練習の主な意図は、漢字語彙の品詞性情報をチェックすることである。(8)では「強調」と「強化」は「～する」を伴って動詞として使われる熟語なので、「な」を伴って使われることはないとして除外される。「な」を伴う形容詞(形容動詞)となるのは「強引」と「強情」であるが、「やり方」との意味的共起性から「強引」を選ぶことができれば正解となる。「強情」というのは、「強情な人」や「強情な子ども」のように、人間の性格を表わす語なので、「やり方」とは共起しないことに注意させる。(9)では「理論」と「論点」は名詞で「する」がつかないので除外される。「する」をつけて動詞となるのは「点検」と「検討」であるが、「点検する」は「機械を～」や「手続きを～」などと共起することが多く、「可能性を～」とは共起しないので除外され、「検討」が正解となる。

(10)と(11)の主な練習意図は、助詞との文法的共起性がわかっているかどうかをみることである。(10)では「～を」があるので「達成」が正解となるわけだが、「～に」なら「到達」が使える。「～が上達した」や「～に到着した」は意味的な観点から排除される。(11)では「戦略」と「計略」は名詞であるから除外され、「～から...される」という受け身になっているのをもとの「～が...する」という形にもどして考えてみると、意味的に「省略」も除外されるため、正解は「侵略」となる。

(12)と(13)は主に意味的共起性の理解をみる問題である。(12)では「～をふるう」という文脈で「暴力」が正解となる。授業ではさらに、「乱暴」は「乱暴する」の形、「暴言」は「暴言を吐く」、「横暴」は「横暴な(子供)」などの形にすれば使えることにも言及する必要がある。(13)では「条約」との意味的共起性から「改正(する)」が正解であるが、同時に「訂正(する)」「改訂(する)」「改修(する)」がどのような語と共起するのかについても教えることが重要である。

(14)と(15)は反義語や対義語を考えさせることによって、意味的な関連語ネットワークを作らせようという意図した問題である。(14)では、「理解」の反対語が「無理解」であるという情報を覚えさせると同時に、否定の接頭辞「不」「無」「非」「未」の使い分けにも注意を向けさせることを意図している。また(15)は、対語の選択と文脈からの選択の両方を要求する練習になっている。「死亡」の対語としては、「生存」も「出生」も有り得るが、「飛行機事故」という意味的文脈の中では「出生」はあり得ず「生存」を選ばなければならない。もちろん「～者」という接尾辞がついていることに着目して「出生」を排除し、「生存者」を選ぶという選択でもよい。

このような用法練習をやりながら、選択肢となった語の用法についても教えていくことによって、漢字語彙の文法的共起性や意味的共起性に関する情報を与えつつ、他の語彙との意味的な関連語ネットワークを作っていくことを目指す授業を行っており、中級・上級の学習者からは語彙力の拡張のた

めに非常に役に立つという声が多い。

今後の課題としては、学習者が漢字語彙の用法練習の中でも特に困難を覚えている項目を選んで練習強化するような方法の実現があろう。中・上級レベルになると、読解や作文などの時間のかかる統合的な課題達成型の学習活動が授業の中心となり、語彙力拡張のための練習にかけられる時間はだんだん限られてくる。授業外でも学習者が自学自習できるようにするための手段として、学習者のレベルに応じて出題できるような練習問題データベースや適応型CAIシステムなども有効であろう。また、何よりも、このような漢字語彙力拡張に役立つ情報を満載した外国人学習者のための辞書の整備が急がれることは言うまでもない。

注

- (1) 字単位の意味的連想というのは、「上下」「左右」「大小」「高低」のような対立概念や「月火水木金土日」「父母兄弟姉妹」「春夏秋冬」のような関連概念の字単位の放出を指している。字形的連想というのは、「木本」「休体」「上土止正」のような類形字や「言語話読」「木林村森校」「水酒油海泳」のような同部首字などの放出を指す。語単位の意味的連想というのは、「学生、先生、学校、教室、練習、宿題」や「物理、化学、数学、経済、政治、歴史」などのような関連語彙の放出を指す。
- (2) 筑波大学留学生センターでは、外国人留学生を対象に以下のような補講の漢字クラス（平成11年度筑波大学開設科目一覧より）を開講しており、ここでは「漢字2」と「漢字3」のクラスでのテスト結果を分析対象とした。

漢字0：100字程度の漢字を知っている非漢字圏の学生を対象に、300字程度の基礎的な漢字力をつける。教材は『基本漢字 500 Basic Kanji Book』Vol.1 と練習プリントを使っている。

漢字1：300字程度の漢字を知っている学生を対象に、基礎漢字 500 字の総合的な練習を行って基礎漢字力をつける。教材は『基本漢字 500 Basic Kanji Book』Vol.2 と練習プリントを使っている。

漢字2：500字程度の漢字を知っている学生を対象に、漢字の成り立ちや漢語の意味・用法等について総合的な練習を行い、中級の漢字力をつける。教材は『漢字 1000PLUS Intermediate Kanji Book』Vol.1 の1課～5課と練習プリントを使っている。

漢字3：800字程度の漢字を知っている学生を対象に、特に漢語の用法や同音の漢字の知識等、さらに高度な漢字力をつける。教材は『漢字 1000PLUS Intermediate Kanji Book』Vol.1 の6課～10課と練習プリントを使っている。

漢字4：1000字程度の漢字を知っている学生を対象に、分野別の漢字語彙の拡充を図ると同時に弱点を克服するための練習を行う。教材は自主作成のプリント教材を配布して、使っている。

(3)これらの品詞性については、1つの単語が2つ以上を兼ね備えている場合も多い。例えば、「影響」は動詞性と名詞性の両方を持ち、「健康」は形容詞(形容助詞)性と名詞性の両方を持つと考えられる。また、「乱暴」のように、動詞性、形容詞性、名詞性の3つを持つものもある。

参考文献

1. 伊藤寛子・和田裕一(1999)「外国人の漢字の記憶検索における手がかり - 自由放出法を用いた検討 - 」日本教育心理学会編『教育心理学研究』第47巻 第3号: 346-353
2. 甲斐睦朗(1989)「語彙指導」玉村文郎編『講座日本語と日本語教育7 日本語の語彙・意味(下)』明治書院: 323-343
3. 加納千恵子・他(1989)「自由放出法による外国人の漢字知識の分析」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』4号: 65-91
4. 加納千恵子(1997)「非漢字圏学習者の漢字力と習得過程」『日本語教育論文集 - 小出 詞子先生退職記念 - 』凡人社: 257-268
5. 加納千恵子(1999)「初級漢字の品詞性と造語性」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』14号: 45-79
6. 玉村文郎(1993)「日本語における漢字 - その特質と教育 - 」『日本語教育』80号 日本語教育学会: 1-14
7. 野村雅昭(1999)「語彙調査データによる基本漢語の抽出」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』12: 21-54
8. 森田良行・村木新次郎・相澤正夫編(1989)『ケーススタディ日本語の語彙』桜楓社

本研究は、文部省科学研究費補助金基盤研究(B)(1)「専門分野別漢字語彙教材データベース開発に関する研究」(課題番号 09558023)からの助成を受けている。